

○六年―一九〇九年にペリオ氏といふやうに、殆んど競争となり、此の間ロシアからもオルデンブルグ氏をはじめ、其他の人々の探検があり、またウルムチ駐在の同國領事官の手によつて、終始遺物の蒐集を怠たならなかつた。わが國からは公けの事業としては行はれなかつたが、大谷光瑞氏が堀、渡邊氏等と共に明治三十五年（一九〇二年）この地方に入り、ついで明治四十一年―四十二年には橋、野村の二氏、明治四十三年―大正三年には橋氏及び吉川氏の探検が行はれた。

このやうに諸國の探検家が、十數年の間相ついで、此の地方に入りこんだ有様は、じつに近時學術界の偉觀であつた。これらの人々はひとしく天山の麓の地方、即ち北道に當つて位するカシュガル、庫車、カラシャール、ツルファン附近をしらべ、それぞれ古の疏勒、龜茲、焉耆、高昌諸國の史跡を探つたが、スタイン氏とわが國の諸氏とは更に南道諸國の探検にも従つた。

こゝに是非附記しておかねばならぬことは區劃嚴密にいへば、中央アジアとは區別すべきかも知れないが、これと接した支那東部甘肅省の一地、燉煌の探検の次第である。甘肅省の西端に位する燉煌の名は、古く漢代以來支那の史乘に見える。燉煌に近くその南東に當る水草地に、一脈の丘陵があつて、今はわが國にも有名になつた千佛洞がある。ちようど蜂窩のやうに丘腹にうがつて、建てつらねた洞窟寺で、洞内には佛像を祀り、窟の外を繪畫彫刻を以て飾ることは諸方に存在する千佛洞と同じである。スタイン氏が第二回目の探検で、こゝに辿りついたのは一九〇七年の三月であつた。この時、或人から、二年許り前に、砂に埋没して居つた一つの佛洞から漢文や異體の書で書いた多くの書物を見出した事があると聞いたので、間もなく其調査に手をつけた。